

最終講義に代えて

「学芸は眉を顰めず」

——階級のディスクール・断章

Fair Science frown'd not on his humble birth,
And Melancholy mark'd him for her own.
—— Thomas Gray¹

中村 秀之

なかむら ひでゆき

立教大学 現代心理学部映像身体学科教授 映画研究・表象文化論

「楽園の余所者」

通算24年にわたる大学専任教員の職を定年で辞するにあたり、幸いにして与えられた機会に書き留めておきたいことがあります。慣例として、このような場で振り返るべきことは学問的な自己形成や研究・教育における交友関係などでしょう。しかし私の場合、むしろその前提となる1つの事実だけに絞ることをお許しいただきたい。それは、私が労働者階級出身の大学教員だったという特殊な事情です。このように書くと、「無階級社会」の幻想にとらわれている人たちは目を斜くかもしれません。けれども、階級関係は厳然と存在する、これこそ私が幼少期から漠然と経験し今では明瞭判然と認識するようになった事実にはかなりません。

私の手元にアメリカの社会学者たちが編んだユニークな本があります。『楽園の余所者——労働者階級出身の大学教師たち』という表題で、1984年に刊行され96年に改訂版が出ました²。第二次世界大戦後のアメリカ合衆国で労働者階級出

1 Thomas Gray, "Elegy: Written in a Country Churchyard," *A Book of English Poetry: Chaucer to Rossetti*, collected by G. B. Harrison. Harmondsworth: Penguin Books, 1950, p. 201. 「その生まれ卑しきも「学芸」は眉寄せず／「憂鬱」はしるして、わがものとなしにけり」。トマス・グレイ「田舎の墓地で詠んだ挽歌」福原麟太郎訳、『墓畔の哀歌』岩波文庫、1958年、105頁。／は原文の改行箇所。

2 Jake Ryan and Charles Sackrey eds., *Strangers in Paradise: Academics from the Working Class*. Lanham: University Press of America, Inc., 1996.

身の大学教員が増加した事態を踏まえて、高等教育の構造変動に関する編者たちの分析と該当する24人の自伝的エッセーで構成されています。編者自身が認めるように、手記の著者がほとんど白人男性の人文社会系研究者であるというバイアスが難点であるとはいえ、大変興味深い書物です³。

しかし、労働者階級出身の大学教師の話といっても、メリトクラシーの恩恵を受けて階級上昇を果たした人々の成功譚ではありません。むしろ表題の通り、彼らが大学では「余所者」である所以が異口同音に語られています。まず、大学は中流階級以上の文化を体現し階級関係を再生産する装置であり、彼らのポジションの矛盾は否認しようがありません。また、幼少期から身につけたハビトゥスと成長して身を置くことになった社会のエートスとの調停は困難で、葛藤は避けられません。このような問題が議題として設定されることがまれである要因も、すでに別の研究者が指摘するところですが、すなわち、一般に労働者階級の人々は高等教育に進学することが相対的に少ないため、大学には階級の問題を提起するに足る有力な集団が形成されにくい。また、たとえアフーマティブ・アクションで労働者階級の女性や労働者階級の有色人種の人々が大学に進学しても、関与的な属性とみなされるのは性や人種であって階級ではないのです。そもそも、階級上昇を果たしても性や人種・民族の同一性は変わらないのに階級的同一性は失われてしまうという根本的なジレンマがあります⁴。この点については、かなり古い例であるにもかかわらず、自身も労働者階級から大学者になったジュール・ミシュレの次の言葉が今でも引用されることがあります。

彼らは混合し、雑種的なものとなる。つまり自分たちの階級の独創性を失うと同時に、他の階級の独創性を獲得することもできないのである。困難なのはのほろことではなく、のほろながらも自己として留まりつづけることなのである。⁵

3 「楽園の余所者」の改訂版の前年に、やはり労働者階級出身の大学教員の、しかしより広範な属性の著者たちによる自伝的エッセー集が出版された。C. L. Barney Dews and Carolyn Leste Law eds., *This Fine Place So Far From Home*. Philadelphia: Temple University Press, 1995.

4 David E. James, "Introduction: Is There Class in This Text?" in *The Hidden Foundation: Cinema and the Question of Class*, eds., David E. James and Rick Berg. Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1996, pp. 2-3.

5 ジュール・ミシュレ『民衆』大野一道訳、みすず書房、1977年、28頁。

このような困難によって、「楽園の余所者」は、みずからの階級移動と職業的環境から「階級の隠された傷」⁶を負うことになります。

アメリカや日本と違って階級社会であることを誰も否定しないイギリスやフランスでは、かえって、労働者階級出身であることで著名な大学人が目につきます。現代のフランスではピエール・ブルデューが代表です。イギリスでは、カルチュラル・スタディーズの祖とされるリチャード・ホガートやレイモンド・ウィリアムズ、そのウィリアムズの学生だったテリー・イーグルトンが広く知られています。これらの人々が偉大な例外者であることは言うまでもありません。

日本でも、社会階級と教育的達成の相関関係あるいは教育の階層格差の実態は明らかにされてきました⁷。しかし、偉大であれ凡庸であれ例外的事象に関する実証研究の存在は寡聞にして知りません。この機会に、およそ「楽園」などとは言えない今の日本の大学ではあるにしても、その中で「余所者」であった私自身のケースをごく簡単にでも記しておくことは、まさにブルデューの言うような「自己＝社会分析 [auto-socioanalyse] のための素材」⁸を提示するという点で多少の意義もあるのではないかと考えます。当事者の特殊な心理を知ることよりもむしろ一般的な社会的関係性を理解するための1つの資料という意味です。ですから、自伝や私小説のようなものを始めるつもりはありません。以下に読まれる文章の少なからぬ部分は、この問題について私自身の目を開かせると同時に励ましてくれた書物や映画作品への言及とその引用によって構成されています。かつてロラン・バルトが制度的言説から周縁化された「恋愛のディスクール」の「確認 [affirmation]」⁹を企てたひそみにならえば、〈階級のディスクール〉のささやかな「確証」、ただし、文字通りのその断章ということになるでしょう。

「子ども時代」

映画や小説の中には、ある真実の言葉を登場人物に言わせるために虚構の仕掛けを動員しているように見える作品があります。『キング・オブ・コメディ』（1983年、マーティン・スコセッシ監督）の主人公、ルパート・パプキン（ロバート・デ・ニーロ）

6 Richard Sennett and Jonathan Cobb, *The Hidden Injuries of Class*. New York: W. W. Norton & Company, 1972.

7 書名を列挙することは控えるが、苅谷剛彦の一連の業績がめざましい。

8 ピエール・ブルデュー『自己分析』加藤晴久訳、藤原書店、2011年、15頁。原語の補足は訳者。

9 ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁朗訳、みすず書房、1980年、3頁。補足は引用者。

は、憧れの人気コメディアンを誘拐して代りに自分がTVショーに出演するという大胆な計画を成功させます。カメラの前に現れたルパートは何を話すでしょうか。ここでは分析などしませんが、映画が彼の言葉をどのように聞かせるのか、未見の方はぜひご覧ください。さて、その台詞です。

“Now, I'd like to begin by saying that my parents were too poor to afford me a childhood...”¹⁰

「貧しすぎて子ども時代を与えてくれる余裕がなかった」。私の場合、この言葉をそのまま両親に向けることはできません。そんなことをすれば不当な非難を加えることになります。とはいえ、少なくとも相対的剥奪感を抑えられるほどの、望んだものが与えられなかったのは確かです。

大正生まれの父母はともに小学校卒で、私が生まれたとき両親は小さな雑貨屋を営んでいました。幼い頃、天気の良い日中はリヤカーに品物を積んで街商に出る父に、「後押し」と称して同行したことを覚えています。店頭で母が売る茶碗の糸底に紙やすりをかけて渡す手伝いをしたときの指の感触もよみがえってきます。まもなく店が傾き、狭い家土地を売り払って借金を返済し、父は製紙工場の工員になり母はスーパーマーケットにパートで勤めるようになりました。バーナード・マラマッドの小説『アシスタント』(1957年)で、ブルックリンの小さな食料品店を営む父親を娘の視点に寄り添って描いた一節は、私の父にオーヴァーラップします。

なにしろ彼と幸運とは、敵^{かたき}同士とまでいかぬにしろ、どうも仲がよくなかったからだ。彼は長い時間を働いた、正直そのものだった——自分の正直に縛りつけられ、いわばそれが彼の心の底に深く根を張っていたとも言えて、だますことなど大きらい——それでいてだまされるほうは一人前で、他人のものは決してほしがらず、だから自分はますます貧乏になっていった。¹¹

10 『キング・オブ・コメディ』、ブルーレイ。発売元：20世紀フォックス ホーム エンタテインメント ジャパン、2014年。

11 バーナード・マラマッド『アシスタント』加島祥造訳、新潮文庫、1972年、26頁。

私の家にはほとんど本がありませんでした。父はときどき工場から、トイレットペーパーの原料になる古本の中で私に読ませたいものや私が興味を持ちそうな本をもらってきてくれました。映画『喜劇 男は愛嬌』（1970年、森崎東監督）の病気で寝たきりの少年は屑鉄屋の父親が拾ってきてくれた本で世界を知ります。幸い私は大きな病気をせずに育ちましたが、この少年は自分と重なります。父が持ち帰った本は分野が限られていました。近現代史や戦記もので、自分ではほとんど口にできなかった戦争体験を間接的にでも知ってほしかったのだと思われます。子ども心にも薄々感づいてはいたものの深く考えようとはせず、後で悔やむことになります。父は寡黙な人でしたし、私が勝手にいろいろな本を読み漁って自分の境遇に不満を募らせるようになってからは特に、2人で何かを語り合うことはありませんでした。私は読書を通じて自分独自の観念的な準拠集団を持つようになり、その結果、父と息子の間に、いわば階級文化の裂け目が開くことになったわけです。この点については、イーグルトンがインタビューで自分自身やウィリアムズの家族関係を語っている箇所に通じるものがありそうです¹²。

階級文化と書いたのですが、現代日本には頼りになる「労働者階級の文化」と言えるものが存在しないことはつとに指摘されています。カルチュラル・スタディーズの名著『ハマータウンの野郎ども』の日本語訳の「訳者あとがき」（日付は「1985年新春」）の一節を引用します。

イギリスの〈野郎ども〉は、学校から「落ちこぼれ」でも、職業世界に根づいている（逞しさも退嬰もあわせもつ）労働者階級の文化に抱擁されて、それなりに屈せずにはやってゆく。しかし日本の生徒たちは、ひとたび学校教育から脱落すれば、すなわち「勉強して下積みでない仕事につく」という「順接」に失敗すれば、「無階級」をたてまえとする国柄であるだけに、みずからの労働生活を支えるに足る「対抗文化」をどこにも見出せないまま、劣等感にさいなまれることになるのではないか。そういう思いを禁じえないのである。¹³

12 テリー・イーグルトン＋マシュー・ボームント『批評とは何か——イーグルトン、すべてを語る』大橋洋一訳、青土社、2012年、58-60頁。

13 熊沢誠・山田潤「訳者あとがき」、ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗 労働への順応』熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫、1996年、456頁。日本語訳の最初の刊行は1985年。

もちろん、対抗的な「労働者階級の文化」がないのは労働者階級が存在しないからではなく、また、もともと文化が存在しなかったわけでもありません。大衆情報化の急速な進展と労働組合に対する執拗な攻撃や懐柔によって解体されたと言うべきでしょう。それはまさに私の少年期・青年期に当る1970年代に急速に進行した事態だと思われます。

『ハマータウンの野郎ども』の日本語訳が出版されたのは、ちょうど私がひどい回り道をして大学に入り直し社会学を学び始めた頃でした。興奮して読みましたが、私自身が労働者階級にとどまろうとしなかったというだけでなく、労働者の階級文化の欠如という当方の事情もあってか、その興奮は今から振り返るともっぱら理論的なもので、自分にとって切実な本だと感じたわけではありませんでした。最近、ブレイディみかこの本によって気づかされ、軽いショックを受けたのは、あの「ハマータウンの野郎ども」は1955年生まれ私の私とほとんど同世代だということです¹⁴。当時はうかつにもそのことに思い当りませんでした。

いずれにしても、私には「文化資本」が欠けていました¹⁵。また、年長者であれ同年代の友人であれ人との交流の機会やそのための資源を得られなかったのも大きな制約でした。成長の過程における関係財の乏しさを、後になって、ことさらに内心の言い訳の種にすることもありましたが、客観的な事実であったのは確かです。そんな私に精神の糧を与えてくれ、いやそれ以上に、逃避の場所を提供してくれたのは、学校の図書室や市立図書館、そして当時は料金が安くて私にも頻繁に通うことができた映画館でした。その頃の私にとって本と映画は、シャルル・ボードレールなら「この世の外なら何処へでも」と憧れるような空想の世界でした。特に映画館は、暗がりの中で独り別の世界に没入できるシェルターだったのです。

後年、大学で教えるようになって、「先生は映画を作りたいと思ったことはないんですか」と学生から質問されることが何度かありました。そのたびに、「ないです。見るだけでも大変だし、身の程をわきまえていますから」とか、「ありません。集団行動は苦手ですから」などと、それぞれ嘘ではない答えを返してきたのですが、それが真相というわけではないにしても心の奥底で呟いていたもう1つ

14 ブレイディみかこ『ワイルドサイドをほつつき抜け——ハマータウンのおっさんたち』筑摩書房、2020年。

15 現代日本の教育格差における文化資本の重要性を新しい研究が明らかにしている。松岡亮二『教育格差——階層・地域・学歴』ちくま新書、2019年。

の返答がありました。「ないですね。でも、例えば高校の頃とかに8ミリカメラで遊んだりすることができていたら、違ったかもしれません」。

現実¹は、私に紙と鉛筆で出来ることをするように勧めてくれました。

他方、両親は息子に家庭の経済状態を直視させて真剣に将来を考えさせるといった厳しさに欠けていました。塾に通うこともなく、いわんや家庭教師に習うなど論外で、とりあえず学校の勉強は授業を聞くだけでこなせていたこともあって、不満を抑圧しつつ閉じた世界で独りぼんやりと夢を見ていたような子ども時代でした。自分に何かの能力があるとも思えず何かに挑戦しようという覇気も持ち合わせていませんでした。ただ、高校受験のとき、私は地元の県立校だけに出席したのですが、同級生が東京の進学校を受験したと聞いて、なぜ自分はそうではないのかと不思議な感じにとらわれたことは覚えています。

「出口」

そのような子ども時代から私が抜け出した過程は緩慢で複雑でした。私がしばしば思いを馳せるのは映画『愛と希望の街』(1959年、大島渚監督)の少年との違いです。彼は中学3年生で、病弱の母と知的障害の妹と3人でスラムに暮らし、放課後や休日には駅頭で母の生業である靴磨きを一緒にしています。物語の年代からすると、彼は現実の私より10歳ほど年長であるにすぎません。私たち家族が店を畳んだ後に移った借家は映画の少年が住むバラックによく似た小さな安普請でした。しかしそれ以外では、私は少年ほど過酷な状況に置かれていたわけではなく、むしろ相違点の方が顕著です。そのうちの1つである少年の行為が、繰り返し私の脳裏に浮かび、考えることを強いてきました。それは、少年が映画の終盤で、自分の曖昧な階級意識や現実に対する欺瞞の関係の象徴であった鳩小屋を打ち壊すことです。そして彼は中学校を卒業して町工場に就職します。鳩小屋の破壊は少年が子ども時代と絶縁して新しい人生に踏み出す瞬間を悲痛な鋭い光で輝かせています。

私には、この少年の1度限りの決定的な身ぶりに匹敵するような行為はありませんでした。映画と現実との一般的な相違と言えばそれまでですが、私が子ども時代から脱した行程は長く入り組んだもので、それを縷々述べ立てることはしません。1つの寓話に頼ることにしましょう。フランツ・カフカの「あるアカデミーへの報告」(1917年)です。アフリカで捕らえられた1匹の猿が、輸送される船上で狭い檻から何とか脱出しようとします。猿は人間たちを観察し、その動作や発

話を模倣し、努力の結果、ついに人間と同じような言動ができるほどに熟達します。物語は、このようにして檻から出てサーカスの人気タレントになった猿が自分の半生を回顧して学会に報告するという形をとっています。カフカの作品の中でもよく知られた短編で、例えば、『ニックス・ムービー 水上の稲妻』（1980年、ヴィム・ヴェンダース監督）にはニコラス・レイがその舞台化を演出している場面が出てきます。この話を、スターになったわけでもない私のアレゴリーとしたい理由は次の言葉にあります。

そうなのです、私は自由を欲したのではありません。ただ出口がひとつ欲しかっただけです。右であれ、左であれ、どこに向かってであってもいい。ほかに要求するものは何もありませんでした、その出口がたとえ錯覚でしかないとしても。¹⁶

「猿」であった私にとっての「人間」の世界は書物でした。「自由」を欲したわけではありません。まして富や地位にかかわる「成功」でもない。ただ「出口」が欲しかっただけです。そのために、読んで考えること、私にできることはそれだけでした。ちなみに「右であれ、左であれ」というフレーズはここでの寓意の主眼ではありません。やがて、時間は要したものの、1つの檻から抜け出してはまたしばらくして次の檻から出るという試みを何度か繰り返しました。広い外部へ一挙に逃走するのではなく、そのつど1つの出口を見つけてそこを潜り抜けること……。

例えば、この点はすでに容易に察してもらえると思うのですが、ある時期まで私はルサンチマンに苦しんでいました。それを、克服するとは言わないまでも少なくとも相対化して認識する契機となったのは、ちょうど私が大学に入学した年に日本語訳が出たジル・ドゥルーズの『ニーチェと哲学』を読んだことでした¹⁷。例えば次のような一節です。ここでは新しい翻訳から引用します。

否定とは何か。それは力能の意志の一つの質であり、まさにこの質が、力

16 フランツ・カフカ「あるアカデミーへの報告」浅井健二郎訳、平野嘉彦編『カフカ・セレクション Ⅲ 異形／寓意』ちくま文庫、2008年、71頁。

17 ジル・ドゥルーズ『ニーチェと哲学』足立和浩訳、国文社、1974年。

能の意志をニヒリズムあるいは無への意志として形質化し、諸力の〈反動的－生成〉を構成するのである。反動的諸力が勝利するがゆえに、能動的力は反動的になると言うてはならない。反対に、反動的諸力が勝利するのは、能動的力をこの力が為しうることから分離することによって、反動的諸力が自分たち自身よりも深い〈反動的－生成〉としての無への意志にこの能動的力をゆだねるからである。それゆえ、反動的諸力の勝利の形象ルサンチマン(怨恨、疚しい良心、禁欲主義的理想)は、何よりもニヒリズムの諸形態である。力の〈反動的－生成〉、ニヒリズムの生成、これらは力と力との関係のうちに本質的に包含されているように見える。¹⁸

ルサンチマンや自己懲罰的な抑鬱や虚無感といった、当時の私を苦しめていた否定的な心的状態が、力の欠如や衰退ではなく、まさに活動している「力と力との関係」によってもたらされるという認識は目から鱗でした。数年後に日本語訳が出たミシェル・フーコーの『監獄の誕生』の次の一節も、今度は歴史的なパースペクティブを伴う点が特に啓発的でした。

規律・訓練は(効用という経済的關係での)身体フォルスの力を増加し、(服従という政治的關係での)この同じ力を減少する。一言でいうならば、規律・訓練は身体プーヴォワールの力を解離させるのであって、一面では、その力を《素質》アプティテュード、《能力》カパシテに化して、それらを増大しようと努める、が他方では、《体力》エネルギーならびにそれから結果しうる《強さ》ビュイサンスを反転させて、それを厳しい服従関係に化すのである。¹⁹

『監獄の誕生』がドゥルーズ(とフェリックス・ガタリ)の仕事の影響を強く受けたことはフーコー自身がはっきり認めていることで²⁰、上の2つの引用文の関連性も明白です。真の問題は「力と力との関係」の組み換えにあるのです。

このような読書と思考を続け、紆余曲折を経て最終的に学問の道をめざすことにしました。最初の大学で日本史学科を卒業した後、会社勤めをはさんで学士入

18 ジル・ドゥルーズ『ニーチェと哲学』江川隆男訳、河出文庫、2008年、133頁。

19 ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俊訳、新潮社、1977年、143-144頁。強調は引用者。

20 フーコー『監獄の誕生』、35頁、原注19。

学で入った次の大学で選んだ分野は社会学でした。社会学に関心を抱いたのは、自分と世界との不調和の原因が自分自身だけにあるのではなく、むしろその自己を形成した社会との関係性の中にあるという認識を持つようになったからです。最初は言語と社会階級の関係に強い関心を持ちました。まだ最初の大学で留年していた頃、『教育と社会変動』という論集を読んでバジール・バーンステインの仕事を知ったのがきっかけです²¹。当時、その議論の問題点を正確に理解できたわけではありませんが、言語使用における限定コードと精密コードの区別、文脈依存性と文脈独立性の問題、その教育的達成との関連性は、自分自身の経験に照らして日本にも妥当するのではないかと考えました。同じ頃、ブルデューのことも知り、主著の日本語訳がまだなかったためジャン＝クロード・パスロンとの共著『再生産』の英訳²²に挑戦したものの、これは手ごわく、部分的に刺激は受けましたが、読み通すことはできませんでした。

ともかく、数年後に大学院に進んで社会学の修士号を取得しました。その後で映画研究に転じた経緯は込み入った話になるので省きます。少なくとも言えることは、社会学への私の関心は私自身の自己の社会的形成を明らかにしたいという欲望に根ざしていて、その限りにおいて自己にとらわれたものでした。かつて流行した「自分探し」という言葉を私は嫌悪していたのですが、恥ずかしいことに、どうやら当時の私の社会学修行はそれに類するものであったと言わざるをえません。映画を研究するようになった理由は、振り返ってみると、それを観ることが幼少期から生活の一部をなし、いわゆる鑑賞体験も知識もそれなりに蓄積していた映画が、実に逆説的なことに、私にとって対象としての他性を十全にそなえていた点にあるようです。わかりにくいでしょうが、そう思われてなりません。

こうして私はいくつかの出口を見つけてそのつど檻の外へ出ました。努力を支えてくれる人にも恵まれました。とはいえ、大学の専任教員の職に就くことができたのは、それとはまた別の話で、幸運以外の何物でもありません。マックス・ヴェーバーは名高い講演『職業としての学問』（1919年）の中で、大学でポストを得ることは「まったくもって僥倖であるような出来事」だと言いました。「たしかに、偶然が支配しているだけでなく、それがまあじつに途方もなく高度に支配してい

21 J・カラベル、A・H・ハルゼー編『教育と社会変動——教育社会学のバラダイム展開』上・下巻、潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳、東京大学出版会、1980年。

22 Pierre Bourdieu and Jean-Claude Passeron, *Reproduction in Education, Society and Culture*, translated from the French by Richard Nice. London: Sage Publications, 1977.

るのです。この世で、偶然がこんな役回りを演じている行路を〔ほかには〕ほとんど知りません」²³。そのようなわけで、ここでお名前を挙げることはしませんが、私の「僥倖であるような出来事」に関与された、つまり、私に幸運をもたらしてくださったすべての皆様に、深い感謝の念を捧げます。

「罪」

階級上昇には、つねにとは言わないまでも、「罪」が伴うことがあります。近代社会において教育による階級上昇が生じるようになると、現実においても虚構の中でも、しばしば例外者たちの「罪」と「悲劇」が語られるようになります。その古典的英雄が『赤と黒』（1830年）のジュリヤン・ソレルでした。物語の終盤、ジュリヤンは自分を裁く法廷で、居並ぶ貴族や上層ブルジョワのお歴々に向けてこう言い放ちます。

「皆さん、残念ながら私は、皆さん方の階級に属する光栄を持ちません。」
「…」「私を罰しようと望む人々がいることを、私は知っています。下層階級に生まれ、いわば貧困による弾圧を受けながらも、幸いにしつぱな教育に恵まれ、おごり高ぶった金持たちが社交界と呼んでいるあの世界へ、身のほども知らず入りこもうとする青年層を、私を通じて罰し、かつ向後^{こうご}にわたってその意気をくじこうとする人々であります。／皆さん、以上が私の罪なのです。」²⁴

自分が罰せられるのは場違いという「罪」によってなのだ、と言うのです。もちろん、ジュリヤンの場合、あまりにも強い自尊心、あまりにも繊細な感受性、あまりにも大胆な行動力が、彼を悲劇へと追いやる独創的な要因でした。しかし、ここで重要なことは、主人公のたぐいまれな資質もさることながら、エーリッヒ・アウエルバッハが『赤と黒』を評して、それ以前には「このように倫理的体系的な仕方で、一人の下層階級出身の男をきわめて具体的な歴史的現実の中に置

23 次の研究書中の翻訳による。野崎敏郎『ヴェーバー「職業としての学問」の研究（完全版）』晃洋書房、2016年、36頁。「僥倖[Hasard=賭博]」の強調は原文。引用文中の補足は訳者。野崎氏はヴェーバーが当時のドイツの大学制度の機能不全の事例として人事の問題を取り上げたことを実証しているのだけれども、引用した箇所はほとんど普遍的な真理を語っているのではないだろうか。

24 スタンダール『赤と黒』富永明夫訳、中央公論社、1993年、516-517頁。〔…〕は引用者による省略。

き、その中で彼の悲劇的な生涯を展開していくという手法はなかった」²⁵と指摘するように、この場違いな人物と反動的な時代の歴史的現実との関係なのです。

場違いという「罪」は、その後のイギリスにおける奨学生制度との関係においても語られてきました。例えば小池滋はD. H. ロレンスについてこう述べています。

学問がよく出来たお陰で、本来自分が属した階級から抜け出して（あるいは根こそぎ引き抜かれて、と言った方が正確であろうか）、つまり「身を立て名をあげ」て梯子を登った青年が得たものは、自己満足でも栄誉の喜びでもなくて、むしろ居心地悪さ、罪意識、社会での疎外感、そして社会への反感であった。単なる知力の梯子ではなくて、社会階級の梯子の問題となってしまうところに、深刻な問題があったのだ。²⁶

興味深いことに、自分自身が労働者階級出身の学者であったリチャード・ホガートは、やはりD. H. ロレンスをその代表として念頭に置きつつ、例外者（奨学生）に対して両価的な冷淡さとも呼べるような態度を示しました²⁷。ホガートにとっては「本来自分が属していた階級」の文化こそが価値を有していたからかもしれない。

しかし、社会移動における例外者を、本来の所属階級から疎外されたデラシネととらえるだけでは不十分ですし、むしろ現代日本については不適切です。本来的で対抗的な機能を持つ階級文化がもはや存在しないからというだけでなく、そのような理解は、問題を個人と集団の二項対立に還元するばかりで、社会の力動的な関係性の中で階級移動の実相を解明することを妨げます。実際、場違いであるとはどういうことなのでしょう。

2020年に出た『東大なんか入らなきゃよかった』という本に、両親が中卒の貧しい家庭に育った東京大学出身者の話が紹介されています。あるとき彼はクラスメートがみな大企業の重役や大学教授の子であることを知り、「場違いなところにきてしまった」と痛感します²⁸。彼は就職活動をしなかったのですが、その述

25 エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメシス——ヨーロッパ文学における現実描写』下巻、篠田一士・川村二郎訳、ちくま学芸文庫、1994年、326頁。

26 小池滋『英国流立身出世と教育』岩波新書、1992年、189頁。

27 リチャード・ホガート『読み書き能力の効用』香内三郎訳、晶文社、1974年、229-240頁。

28 池田溪『東大なんか入らなきゃよかった——誰も教えてくれなかった不都合な話』飛鳥新社、2020年、56頁。

懐が示唆に富んでいます。

「父親がまともな勤め人じゃなかったから、就職をするってことがどういうことなのか本当に知らなかったんだ。会社への入り方が分からなかった。[...] 東大で人間には生まれ持った『格』にちがいがいることを思い知ったよ。俺には生まれながらにして金もコネもなかった。そのことがハッキリと分かったら、なにもかもにやる気がなくなったんだよね。」²⁹

「金もコネもなかった」という格差が重要であるのは言うまでもありません。しかし、示唆に富んでいるのはむしろ引用の前半です。「就職をするってことがどういうことなのか本当に知らなかったんだ」。実は、私はこの言葉を読んで自分のような人間が他にも居ることを知り、深いため息をついたのです。

このような場違いさを理解するための1つの手がかりを与えてくれる論考を、アメリカの社会学者ドルトン・コンリーが書いています。コンリーは、「社会階級」という概念の効用を多様な分野で検証することを目的にした論集の共編者の1人で、その巻末のエッセーで「階級はいかにして機能しているか」を問題にしました。コンリーは次のような問いを發します。すなわち、ジョージ・W・ブッシュのような、学業でもビジネスでも大した成果を挙げるのでできなかった人物が最終的に世界でも最高の権力者の地位につくことができたのはなぜなのか、と³⁰。コンリーの解答は、要するに、父親が以前にその地位を占めていたからである、という一見すると呆気ないものです。しかしその主旨は、経済的基盤や関係資本も重要だけれども、忘れてならないのはそれらによってもたらされる「可能性の感覚」だということです。

ちょうど労働者階級の社会的再生産がその構成員の精神の地平の制限を伴うように、より上位の階級の構築はその構成員の中に可能性の感覚を拡張する。³¹

29 池田「東大なんか入らなきゃよかった」、63頁。

30 Dalton Conley, "Reading Class Between the Lines (of This Volume): A Reflection on Why We Should Stick to Folk Concepts of Social Class," in *Social Class: How Does It Work?* eds., Annette Lareau and Dalton Conley, New York: Russell Sage Foundation, 2007, p.368.

31 Conley, "Reading Class Between the Lines (of This Volume)," p.369. 拙訳。

1つの思考実験をしてみましょう、とコンリーは読者に勧めます。自分がホワイトハウスの執務室に座ったとしたらどうだろうか、大統領というものがどういふものなのかを想像することができるだろうか、と。ジョージ・W・ブッシュはそれがわかる境遇に生まれ育った、というのです。コンリー自身も認めるようにこれは極端な例に違はなく、極端さによって事例としての有効性が損なわれているかもしれません。しかし、これほど極端ではない事例を、当人の能力は別として、他にもいろいろ見出すことができるでしょう。例えば、大学教員である親の生活を幼い頃から見ている子どもが研究者をめざす場合などです。

コンリーの言う「可能性の感覚」の有無は、「金やコネ」には還元できないトータルな「生活形式 [Lebensform]」の違いとして理解すべきではないでしょうか。生活形式は、それを共有する者にとっては自明な、とらえがたい複雑な規則から成っています。共有しない者にはそれを理解したり、その規則に従って適切に行ったりすることができません。それは、世界の最強国の最高権力者とそれ以外の人々との間の違いというだけではありません。近代以降の社会はさまざまな生活形式が水平に区分され垂直に層を成して、相互理解が可能かどうかにかかわらず異質な生活形式を持つ者同士が相互交渉することを促されるシステムです。階級上昇による例外者の場違いさは、異なる生活形式の間の接触の不可避性と共有の不可能性の問題の1つとして考えることができそうです。だとすれば、そこで何が起っているのか、何をなすべきなのか。

「つむじ風」

最後に、以上の話をふまえて私の現在の研究上の関心を少し書いてみます。特に関心を持っているのは、異なる階級の相互関係、あるいは階級交差 (class-crossing) と呼べるような問題です。この問題については、すでに、『ステラ・ダラス』(1937年、キング・ヴィダー監督)と『市民ケーン』(1941年、オーソン・ウェルズ監督)をそれぞれ対象とする2本の論文を発表しました³²。両論文は異なる問題設定にもとづいて書いたのですが、物語内容(登場人物の階級上昇)と映画のスタイルとの関係に焦点を合わせた点は共通していました。それに対して今後は、作品それ自

32 中村秀之「映画に社会が現れるとき——『ステラ・ダラス』(1937)の言語ゲーム」、若林幹夫・立岩真也・佐藤俊樹編『社会が現れるとき』東京大学出版会、2018年、325-359頁。中村秀之『市民ケーン』のガラス球——パストラル・モードによる階級表象』、『立教映像身体学研究』6号、2018年、45-64頁。

体のモードや製作と受容のコンテキストにも視野を広げて階級交差の問題に取り組みたいと考えています。その際、そもそも映画の製作やそれに関する議論がおこなわれる領域の階級的特性からすると、上から下へというベクトルを重視することが必要になるでしょう。

ところで、上から下へ向かう視線は作品だけでなく批評にも現れるものですが、この点について、蓮實重彦が樋口一葉の「十三夜」を論じるみずからの資格を留保した一節が印象に残っています。かつて蓮實氏の祖母が華族女学校に通うのに乗せられた人力車と作品中で貧しい出自のヒロインを運ぶ人力車が結びつき、ある時期までその観念連合をうまく処理できなかったというのです。

祖母との血縁を介して『十三夜』をまるで同時代の作品のように身近な体験として読むしかないわたくしは、自分が原田家の跡取り息子のように振る舞ったことはないにせよ、阿関とも録之助とも異なる階層の子弟だと認識せざるをえず、そうであるなら、この作品をどのように論じようと、所詮は抽象的な読みしかできまいという階級的な限界のようなものをそのつど意識するしかなかった。³³

このような上からの「階級的な限界のようなもの」を、蓮實氏が映画について吐露したことがあったでしょうか。その記憶がなかったので私は興味を惹かれました。樋口一葉と映画と言えば、山田五十鈴が一葉を演じた気品と艶のある『樋口一葉』（1939年、並木鏡太郎監督）や美登利の役に美空ひばりを配した闊達な『たけくらべ』（1955年、五所平之助監督）がとても魅力的でした。しかしそれとは別に、成瀬巳喜男監督の作品に見られる、儉しさに強い^{つま}られた気骨ある慎ましさとでも呼ぶべき物腰が、一葉の小説に通じるように思えてなりません。なるほど『十三夜』の場合は祖母と人力車にまつわる個人的な記憶が特別な媒介になったとはいえ、蓮實氏は、例えば成瀬の作品に対して「階級的な限界のようなもの」を意識したことはないのだろうかと、私は素朴な疑問を抱いたのです。

閑話休題。

階級交差の問題については上記の『市民ケーン』論の中でウィリアム・エンブソ

33 蓮實重彦『随想』新潮社、2010年、198頁。

ンの「牧歌」論の援用を試みました³⁴。エンブソンの「牧歌」は特定のジャンルではなく、基本的には、階級の上位者が下位者を理想化するエクリチュールのモードとして理解することができます。ここではある解説書の一節を引用します。

本質的には、エンブソンの牧歌というカテゴリーは人為的仮構による単純崇拜であり、乳しぼりの娘の服装をして芝生の上ではね回ったマリー・アントワネットとその侍女たちの文学的等価物である。[……]牧歌詩とは、そこで、羊飼いのことを詠った詩のことではなくて、羊飼いのことを詠った昔の牧歌のように行為する詩のことである。³⁵

重要なことは、エンブソンが基本パターンの変奏として、さまざまな作品における階級関係の複雑な様相を詳細に分析していることです³⁶。その白眉は、イーグルトンも指摘したように、牧歌のアイロニーを子どもに見出してルイス・キャロルのアリスを論じた章です³⁷。

さらに、上から下へというベクトルを考える上で、コンディセンディング (condescending) という概念が有効ではないかと期待しています。辞書には、「恩着せがましい」とか「相手を見下すような」とか「腰の低い」といった訳語が並ぶ形容詞です。映画作品でも小説でも、あるいは評論や学術論文でもよいのですが、階級的に上位のポジションから下位を扱う態勢をそなえたものを〈コンディセンディングなもの〉と捉えてはどうだろうかと考えています。あからさまにコンディセンディングではない、むしろそうは見えない作品に対して、この概念を発見的に使ってみよう、という狙いです。

例えば、『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（1997年、ガス・ヴァン・サンクト監督）の一場面を取り上げてみましょう。ウィル（マット・デイモン）はDVによるPTSDに苦しむ労働者階級の青年です。ところが、彼は数学の天才であることがわかり、階級上昇の道が開けます。それでも進路に悩んでいるウィルを、ある日、職場で、ともに肉体労働に従事している親友のチャッキー（ベン・アフレック）

34 中村「『市民ケーン』のガラス球」、50-52頁。

35 スタンレー・ハイマン『エンブソンの方法』岡本靖正訳、大修館書店、1974年、21-22頁。強調は原文。

36 ウィリアム・エンブソン『牧歌の諸変奏』柴田稔彦訳、研究社出版、1982年。

37 テリー・イーグルトン「道化としての批評家」道家英穂訳、『批評の政治学——マルクス主義とポストモダン』大橋洋一他訳、平凡社、1986年、260頁。

がこう叱咤します。

“It'd be an insult to us if you're still here in twenty years. Hanging around here is a fuckin' waste of your time.”³⁸

(お前のような天才が) 20年たってまだ俺たちといっしょに居たら、それは俺たちを侮辱することになるんだぞ、と言うのです。社会学の研究が示すように、下位の階級の人々はみずからを守るために強固な仲間集団に閉じる傾向があります³⁹。そのような現実を念頭に置くとチャッキーの言葉はいっそう感動的に響くかもしれません。しかし、まさにここに、この作品の題材処理、あるいは素材の加工の仕方の特質が現れていて、それこそ〈コンディセンディングなもの〉ではないかと問うことが可能です。もちろん、映画としての全体を吟味しなければならぬとはいえ、この台詞などは1つの有効な手がかりになるでしょう。

——というわけで、まだまだ模索の途上なのですが、新たに読む書物や読み返す書物、初めて見る映画や見直す映画、それらに触発されつつ、今や「出口」を潜り抜けるというよりも、マラマッドの小説の貧しい職人がスピノザの『エチカ』に運ばれたのと同様、向後の日々を「つむじ風」のような精神の生に委ねたいと願っています。

「わたしはあの本を近くの町の廃品置場で見つけ、1コベックで買いはしたものの、あとで容易には手に入らない金が無駄づかいしたとくやんだものでした。その後、数頁読んでみているうちに、まるでつむじ風に吹きまくられたように読み続けたようなわけでした。さっきもお話ししましたように、わたしには一語残らず理解できたとは言えませんが、ああいう思想に接していると、まるで魔女の背に乗って空を飛んでいるような感じがします。その後のわたしは同じ人間ではありませんでした。」⁴⁰

38 『グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち』。DVD。発売元：松竹株式会社ビデオ事業部、2002年。

39 山本泰「マイノリティと社会の再生産」、『社会学評論』44 (3)、1993-1994年、262-281頁。

40 バーナード・マラムード『マム』『修理屋』橋本福夫訳、早川書房、1969年、98頁。